

多職種連携教育と実践

名城大学薬学部

病態解析学 I 教授 野田 幸裕

●多職種連携教育は薬学教育において喫緊の課題●

最初に、多職種連携教育の現状について概説します。

近年、医療の高度化と医薬分業の進展や高齢化に伴う包括的な在宅医療において、医療過誤を防ぎ、安心・安全な薬物治療を推進できる薬剤師が求められています。このためには、疾病・治療薬についての専門知識・技術を駆使し、医療チームの一員として医師など多職種とコミュニケーションがとれ、地域の医療機関と協働して治療に関わることができる薬剤師の養成が不可欠であります。

このようなチーム医療を実践するためには、異なる専門職同士が互いに理解し合い、尊重する態度や、基礎となる問題解決能力、コミュニケーション能力、協調学習能力などを身に付ける必要があります。これらの能力を有する人材の育成が重要であります。医療現場では既に、多職種が参加する医療カンファレンスなどが行われていますが、卒前からの教育理念に基づいた教育・演習が必要であり、その方策こそ多職種連携教育：Inter-professional Education：IPEの実践であります。

WHOもチーム医療実践のために、卒前教育においてIPEの導入を奨励しています。わが国においても医学・看護学教育の分野においては、それぞれの学部が連携してIPEに取り組む大学が増えていますが、薬学教育においては、卒前から医学生、看護学生などと共にIPEを実践している例は少ないです。したがって、薬学教育においても、互いの専門性を理解し、協調的に職務を遂行できる医療人としての能力を習得させることが喫緊の課題であります。

●模擬患者の参加が特徴的な「なごやIPEネットワーク」のプログラム●

次に、他の医療系学部を有さない名城大学薬学部が実践している多職種連携教育がスタートした経緯とそのネットワークを紹介いたします。

名城大学では、これまでも薬物治療における薬剤師の役割に関する教育に力を注いできました。しかし、他の医療系学部を有さないため、チーム医療に関する教育が不十分でした。もともと臨床教育・研修の場を確保することを目的として、近隣の医療機関、名古屋

大学医学部附属病院、藤田保健衛生大学病院、愛知医科大学病院、安城更生病院との連携基盤はありました。また、名古屋大学や藤田保健衛生大学の医学部の先生方と協働してコミュニケーション教育に取り組んでおり、各大学の医学部でも「多職種連携教育の体制構築と充実」というニーズがありました。

これらが背景となり、IPE実践のための、名城大学、名古屋大学、藤田保健衛生大学などの教員からなる「なごやIPEネットワーク」を構築し、本学部においてもIPEのトライアルを開始し、2012年から本格的にIPEプログラムをスタートさせました。

では、医療連携「なごやIPEネットワーク」による名城IPEの方法と実践について説明いたします。

本IPEプログラムには、基本的に臨床実習の直前か後の4年次から5年次の薬学生、医学生、看護学生などが参加し、半日から1日かけて実施します。

各職種の教員が共同で作成したシナリオに基づいて進めます。特徴は「模擬患者の参加」です。臨床現場の実患者を想定した症例、たとえば、「仕事と義母の介護に迫られている気管支喘息の主婦…薬の副作用が怖く、介護疲れで症状悪化した症例」、また「インスリン導入が怖くて病院に行けない主婦…手足がしびれて何もできない症例」、そして「肺がんの手術のために禁煙が必要な男性…禁煙がどうしても必要かわからない症例」などについて、各職種の立場から模擬患者にアプローチし、その問題点を互いに討論しながらケアプランを作成します。

シナリオに応じて3年次から4年次の理学療法学科、作業療法学科や社会福祉学科の学生が参加するプログラムもあります。

その手順としては、最初に、①プログラムの説明、②チーム医療に関するミニレクチャー、③学部ごとで専門分野の教員による症例に関するミニレクチャーを行い、その後、④チームで集まり患者シナリオを元に問題点、必要な情報を議論します。

そして、医療面談として、①各学部の学生が模擬患者との対応から問題点等を聴取する、②得られた情報をチームで話し合い指導計画を作成する、③実際に模擬患者にチームで指導を行う、を順次実行します。

模擬患者を活用することによって、学生が「他の専門職種に対する自職種の役割」「チーム医療の重要性の理解」や「他の専門職種に対する心理的障壁をいかに解決するか」を涵養しやすいプログラムになっています。

繰り返しますが、紙ベースでの症例検討ではなく、模擬患者が参加することで、プログラムにリアリティーを持たせることができます。臨床で大切なことは、患者の想いや悩みを聴き出せるかどうかです。プログラムの最後には模擬患者からのフィードバックもあるので、患者対応でのコミュニケーション能力の向上にも役立っています。

平成25年度にはホームページ「名城IPE」を構築し、同時にIPEを支援するWEB教材、①患者背景のビデオ、②予習用ビデオとして、チームで症例を検討する前に薬学、医学、看護学としての基礎知識に関する「導入ビデオ」、および③復習用ビデオとして、チームで症例を検討するうえでの各職種の必要なポイントを紹介した「患者へのアプローチビデオ」を

作成・導入しました。

本WEB教材は、教員がミニレクチャーしていた内容です。他の職種の教員が不在の場合にも代役の必要がないため、教員負担は減少し、さらに均一した講義の提供、職種間知識の統合が可能となりました。IPEに参加する薬学生、医学生、看護学生も参加前後にWEB教材が閲覧できることから、基本知識の予習・復習につながり、IPEがより円滑に実施できるようになりました。

本IPEの成果としましては、IPE後に実施したアンケート調査におきまして、薬学生、医学生、看護学生ともに本IPEにより「チーム医療の重要性が理解できた」や「将来の仕事に役立つ」と80%以上の学生から高い評価が得られました。自由記載においても、薬学生は「症例から学んだ薬学、医学、および看護学的な知識の定着・向上につながった」という意見が多くあり、各職種の専門性や役割を理解し、その知識習得につながったものと思われました。一方、IPEに参加した薬学卒業生にアンケート調査を行ったところ、「薬学視点から意見を述べることができるようになった」「薬剤師活動に有効である」「現在の職場で活かされている」と80%以上の卒業生から高評価の回答が得られ、薬剤師業務にとって有用であることが明らかになりました。

質的な分析の結果では、いずれの学生も、①学部間で存在する障壁、②相互に職能を理解する必要性、③チームで発揮すべき自身の職能を認識することが可能となりました。チーム医療における患者との関係性について、薬学生と医学生は「患者を中心とする医療職での連携を考慮したチーム医療」、看護学生は「患者を医療のパートナーとするチーム医療」と認識しており、学部ごとで異なっていました。IPEは、学生が多職種連携の必要性を理解するうえで有用であることが示唆され、本IPEの特徴である患者の存在をより意識できる模擬患者参加型が有用であることが明らかになりました。

●時間と空間の問題を解決する「ウェブキャンパス」の取り組み●

最後に今後の課題と目標について概説します。

連携する各大学・各学部には独自のカリキュラムがあります。さらにはキャンパス間の移動も考慮すると、時間調整が難しい場合もあります。これらの問題を解決するために、「ウェブキャンパス」という新しいシステムの構築に取り組んでいます。プログラムのコアの部分である学生同士のディスカッションをウェブ上で行い、患者と医療チーム、および医療職種間で円滑にコミュニケーションを図る方策を双方から学習するシステムです。「ウェブキャンパス」を活用して、異なる大学キャンパスにおいて、他の医療系学部の学生がグループとなり、ケーススタディを演習的に学習し、医療チームの一員として果たす役割についての知識・技能・態度が効率よく習得できるようにしていきたいと考えています。

多職種とディスカッションを行った経験がなければ、「チーム医療に参加して、処方提案ができて……」というようなことが卒業後に医療施設で即実践できるとは思いません。したがって、薬学部では、多職種連携教育を積極的に行うことで、チーム医療の特性を習得した薬学生の育成に取り組む必要があります。病院実習でも多職種に接する機会はまだ少

ないかもしれません。特に薬局実習では、薬学生に患者や在宅訪問医師、看護師、介護福祉士など幅広い職種と関わる機会をいただき、チーム医療に実践的に取り組むような体験をさせていただきたいと思います。